

の長法寺古墳、近江安土瓢箪山古墳の如き何れもその代表的なものと云ふべく、それらに狭長な竪穴式石室の實際の姿が見られる。今この範圍に入るべきものが遠江國で新たに調査された事は注意さるべきである。たゞ此の種石室の實際を見る機会にめぐまれた評者はこの石室の記述にあつて、これ等從來のもの考慮が殆んどなされず、細長い室の縦れに依り前後兩室を區分してその意味を考へんとせられし事や、又椁の有無に就いて釘の存在を問題とせられてゐる事を寧ろ不思議に思ふものである。石室の實測圖を缺いてゐる爲に早急な判断は固より出来ぬが、別に收められた寫真からすると、石室の中央部に於ける縦れは土壁に依る後の變形とも見られるふしが多い。また古式古墳の椁とはそれ自身割竹形乃至刳舟狀の細長いものが多い點から釘の存否などは此の場合多く考慮する要はないのではなからうか。かやうな一二の點があるとしても本書が忠實に事實を録した上、更にこれを四隣の遺跡と併せて、著者がその結語に考古學的遺物を何らかの古代文化の全體的空間、時間に占める位置を明かにしようとしてゐる態度は吾々に教へる所が多い。この古墳の屬する磐田原古墳群が語る古代文化育成の經過を地域考古學の課題として著者が更に詳しい考察を遂げられることを信じて且つ期待するものである。おおよそ報告書は有りの儘の姿を實物自體に即して記述する事がその主目的である。これこそ考古學者の先づ務むべき任務であるが、その仕事は地味であり、而も勞苦が多い。古墳關係に於いて二十年の長きに亙りこの地味な仕事をつゞけられてゐる著者の態

度に推服するものである。(四六倍版、本文六四頁、圖版二四葉、昭和十四年六月發行、非賣品(藤岡謙二郎))

京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第十九册

京都府に於ける史蹟調査一殊にその考古學的方面に於ては梅原委員の熱心な探査に依り近年愈々學術上の興味を加へ、新資料、新事實の學界に對する提供は、蓋し大なものがあるが、今回其の執筆に係る報告書第十九册は、世人の耳にもなほ新たなる北白川高麗兩廢寺址發掘の結果を録してゐて、わが上代寺院址の研究に與ふる所の新知見は、單なる調査事業としての立場に止まらず、廣く諸方面から注目を受くべき業績が盛られたものである。

さて二つの調査は等しく寺址に關するものであるけれど、その結果からして、北白川の方は出土品に重點が置かれ、高麗寺のそれは、遺構に最も興味が集まされて發掘後の收獲に於ける二つの異つた場合を代表したと見られる。前者の遺蹟は昭和九年秋、京都市北白川別當町から同じく上終町に通ずる市の土地區劃整理土工事中、偶然知られたもの、確實な堂宇址の遺構はたゞ一つであつて、これは二段の石築基礎の上に平瓦を積み重ねて作つてあり、東西にながく、東から西に向つて緩慢なる斜傾をなせる臺地上に營まれたから、勢ひ、西側の瓦積が高く、且つ上半瓦積を二重にして崩壞に備へた構造である。石階は南北兩側の中央にあつて北側が割合によく遺つてゐた。この南面の堂宇の遺構の上には礎石など全く確められなかつたが、別にこれから約一町近く離れた

西方の一段低い道路上に二三大石が現はれて、其の一つに礎石たるを明示する造出しがあつた。但しこれも原位置に造つたものでなく、遺構乍らそれから直ちに堂址の規模などを考へ得ないものであつた。併し、この礎石が存在せる道路附近は又古瓦片の最も願しく埋没せる場所であつて、その古瓦の包含せる状態は本書に詳細な観察が記され、而もこの包含層は西北方、遙か北白川平井町まで及ぶものと推量されて、自らまた遺跡の一部たるを考へしめるものがある。出土品中、土器金具は微量で古瓦類が重きをなし、文様瓦は軒平瓦七種、軒丸瓦約十五種を數へた。就中遺跡の西半地區に出土せる燒成度高い青臙色の丸瓦の如き、二段になつた高い中央の子房から劍頭狀の細長い花瓣六個を放射し、その間に珠文を配するといふ特異の形式をもつて居り、木村氏の拾得した丸瓦の一破片は周縁に珠文とギ印を交互に配する珍しいものである。後者は同じ範より出たと思はれる瓦が洛北深泥池瓦窯址から出てゐる同窯の製品たることを知られ、別に堂址出土、單瓣蓮花文瓦が外區珠文帯に「小乃」なる文字を置き小野瓦窯からの供給品たることを推されるものと、特に興味がある。基壇北面石階の間に挿まつて出た重圈縁單瓣華文の丸瓦はさらに注意すべく、出土當時の状況からみると、之は石敷きと石列との空間を埋める爲に、わざと挿入されたものらしく思はれる點より石階の造營は、この瓦の作られた後に屬することが考へられ、それゆゑ、瓦の文様によつて推さるゝ年代は、本遺構に重要な研究の手懸りを與へたことゝなるのである。而も比較的、數多く出た此種の瓦

や縁に雷文を飾つた瓦は、大和山田寺址、紀寺址出土のそれと極めて似る所から白鳳期乃至奈良時代の製作にかゝると考へられ平瓦、また同様の推論によつて丸瓦との組合せを思はしめる。けれども上にも一二の例を示した洛北の諸窯で燒かれたることの判然と推し得る別の古瓦群は、それが平安朝期の官窯よりの供給品であることを知らしめ、さらに別に獲られた巴文丸瓦が鎌倉時代と見做さるゝに於ては、本寺に長き歴史があつたことが自ら示された譯である。次に堂宇の配置状態についても既に記した如く基壇の出現によつて確かめられた遺構とならび、その西に同じく東西に長い遺構の存在が推定されたのであつたが、かゝる配置は従來傳統的な古い寺院址の型に入らないので一應、疑問視せられるけれども、この際、伽藍配置に對するかゝる類型的見方を一擲して不規則なる堂宇配置の場合をも、素直に、この遺蹟については考慮すべきではなからうか、といふのが最後の考説に於ける力點である。

第二の高麗寺址は相樂郡上狛町にあり、南、敷町をへだて、木津川に面する高臺地を占めた地域で調査の端緒は、すでに本府報告第一冊にあらはれてゐる。而して之が再調査の發端は昭和以降の道路改修工事によつて、また新しく遺構、遺物が見出されたことであるが、之に關聯して昭和十三年、田中、木村、中津川の諸氏により遂に心礎や基壇が發見されるに及んで愈々根本的再調査の必要が起つた譯である。かくて第一回は五月二十八日に第二回は十月九日より約一週間繼續の大規模な調査となつた。發見され

た遺構は北の土壇の外に南のそれに二つあることが分つた。北方土壇(講堂址と推定)は露出せる二個の礎石以外微證さるべきものなく、自然、興味は南方土壇、就中その東側の遺構(推定塔址)にむけられたのである。初めの調査では、塔址中心礎石の南側面に舍利孔を穿つてあると云ふ新事實を最も主なる收獲とした。第二回目に入つては塔址に於て瓦積基壇の内側に之と併行して石積の列あることが判明し、之こそ本来の基壇にして瓦積の方は單なる外張りとも見られてきたこと、瓦積の外側に栗石の敷かれてあること、さらに塔址西北角の發掘が西方にすゝめられた結果、栗石は五尺餘にしてなくなり、しげらく行つて再び栗石の敷かれた場所があらはれ、やがて西の瓦積に接續せるを知つたのである。即ち再びあらはれた栗石から西へは別の遺構(金堂と推定)で之には瓦積の内側に石積の列はなかつた。而して最大の興味は塔址南側基壇中央の發掘にあり、遂に石階が半ば原形を留めた状態で見出され、推古式單瓣蓮華文の鮮かな軒丸瓦もこゝから出土した。石積の列はこの部分に缺くが、他の個所に使用せられた石積の石を石階の用材と比較するに等しく同質の花崗岩で而も共通に風化澱爛した形痕をもつ點が擧げられた。之は恐らく石階の石が、もと石積を缺いた部分に使用せられてゐたものであり、且、火災によつてかく石の澱爛を見たのでないかといふ推論へ導く。金堂址の方はその西側が破壊され南面に於てはそれが中央にまで及んでゐる爲、塔址の如き石階は判然するに至らなかつた。尙附近の眞如池畔には本寺の瓦窯址があつたといふ。次に遺物では古瓦類が大

半を占め文様瓦中、軒丸瓦類では石階の西邊より出た上述の推古式瓦や、特異の例とすべき重弧文丸瓦が注意され割合多く見られたが、中央の子房凹み蓮子が星狀をなして突出し周縁また高くなつた異風の瓦は本寺に特有な類として擧げられる。ついで鐵釘、金銅金具、化粧張、小石材、土器片等の出土品をみるに多くは本調査以前の發見にかゝり、就中、帶狀の細長い板金具と寶相華を刻した薄い金具片が同一品の各部分で之が破風舞みの飾金具片であるとす推定は今回調査の一收獲であつた。かくして本寺の沿革は右の各種遺物を中心に、およそ推古期より始まり白鳳の盛期を經、奈良朝より平安期に及んだとする想定に導かれる譯であるが、瓦積基壇については他の寺址との比較によつて、之がほゞ白鳳期のもつと推される。然らば推古式瓦出土の事實は自らこの瓦積基壇上に營まれた堂宇よりも古き時代のそれらに使用せられたと考へざるをえず、従つて瓦積の遺構に先立ち、何等かの建物があつたこと、想像され、石積の列こそはその基壇をなしたものと思はれる。之を年代順に云へば、まづ推古期に石積の基壇をもつ建物が一つ作られ白鳳期になつて堂宇擴張とともにその外側に瓦積の基壇を設ける新しい設計がなされ、石階は既述の如く石の状態なり、性質が石積基壇の用材に酷似する所から、之を南面中央部の石積基壇を取はづして轉用したと見、同時にこの時新しく金堂講堂が營まれて、今みる遺構の配置を示すに至り、之はやがて奈良朝を通じて修理などが行はれ平安朝に及んだとするのである。ここで遺構の配置、様式のみにより寺址の時代決定をなすは避けら

れねばならぬこと、さきの調査同様、著者の強調されてゐるのは注意すべきである。たゞ心礎あるによつて比較的平面形の明かとなつた塔址の遺構は、之を薬師寺三重塔と類似の建築に擬せられる。破風拜みの飾金具の如きは、法隆寺金堂のそれと比して餘り小さくない點が、また推定困難な金堂の規模に一つの資料を提供するであらうといふのである。

以上おほまかな本書内容の紹介は却つて讀者に理解の困難を起さしめるであらうが、かゝる心配は實際に本書を繙かるゝことによつて解消するばかりでなく、四十一の挿圖と四十九に上る鮮明なる圖版とは懇切なる本文の叙述と相俟つて此の調査事業の全貌を何人にも手に取る如く教へてゐる。(四六倍判、本文八六頁、昭和十四年三月三十日發行、非賣品(村山修一))

彙報

喜田文學博士の訃

京都東北兩帝國大學文學部講師文學博士喜田貞吉氏は胃疾を以て去る七月三日夜東京順天堂病院で長逝せられた。博士は徳島縣出身で、第三高等學校を経て明治二十九年東京帝國大學の國史科を卒業せられて後、我が學界に密與せられた大きな業績に就いては、前年還曆の賀を迎へられた際自刊の『六十年の回顧』に詳で

あり、またその一端も本誌上に録されてゐるので、いま改めて記すまでもないが、華甲の壽を受けられて後も不相變各方面への活動をつゞけられた。昭和十年直腸を病んで、一時重態を傳へたが幸に手術後の経過よろしく、健康舊に復して壯者を凌ぐ元氣で、更に東奔西走、昨年は朝鮮に單獨旅行せられ、今年に入つては足立博士の法隆寺に關して新見解を發表するに及び、老體を擧げて論戰を開始して意氣の盛なるを示されつゝ、あつたが、病その間に發し、六月初東北大學の講義を終へて歸京後病臥遂に立たず、多年自ら期された法隆寺論を第一冊とし、以下帝都の研究其他十指に餘る諸研究を集大成する事業の緒に就くに先立つて逝かれた。六十九の享年は必ずしも常人にとつては短命とは云ひ難いが、常に九十の長命を口にし、古稀に近づき乍ら、あらゆる研究に積極的な態度で臨み、常に第一線に立つことをつとめられた博士の所在は、其の特色ある學風と相俟つて、我が史學界の一偉觀であつた。されば其の長逝は博士自らの遺憾は云ふまでもなく、諸方面から哀惜せらるゝ所で、學界に一脈の寂寞感を與へる次第である。

送葬の儀は博士生前の主旨に基いて、東京での告別式を廢し、十三日郷里の阿波國那賀郡立江町柳瀬にて行はれ、梁貞隆法居士と諡して、即日博士生前の設計建設に係る墓域に埋骨せられた。

博士は京都帝國大學文科大學に史學科が創設後間もなく講師を囑託せられて以來三十年、其の間教授に任じて講學、また本會當初よりの會員として、特に評議員に擧げられ、多くの名編を密與して、會の發展を助けられた。されば其の訃報到るや文學部長西